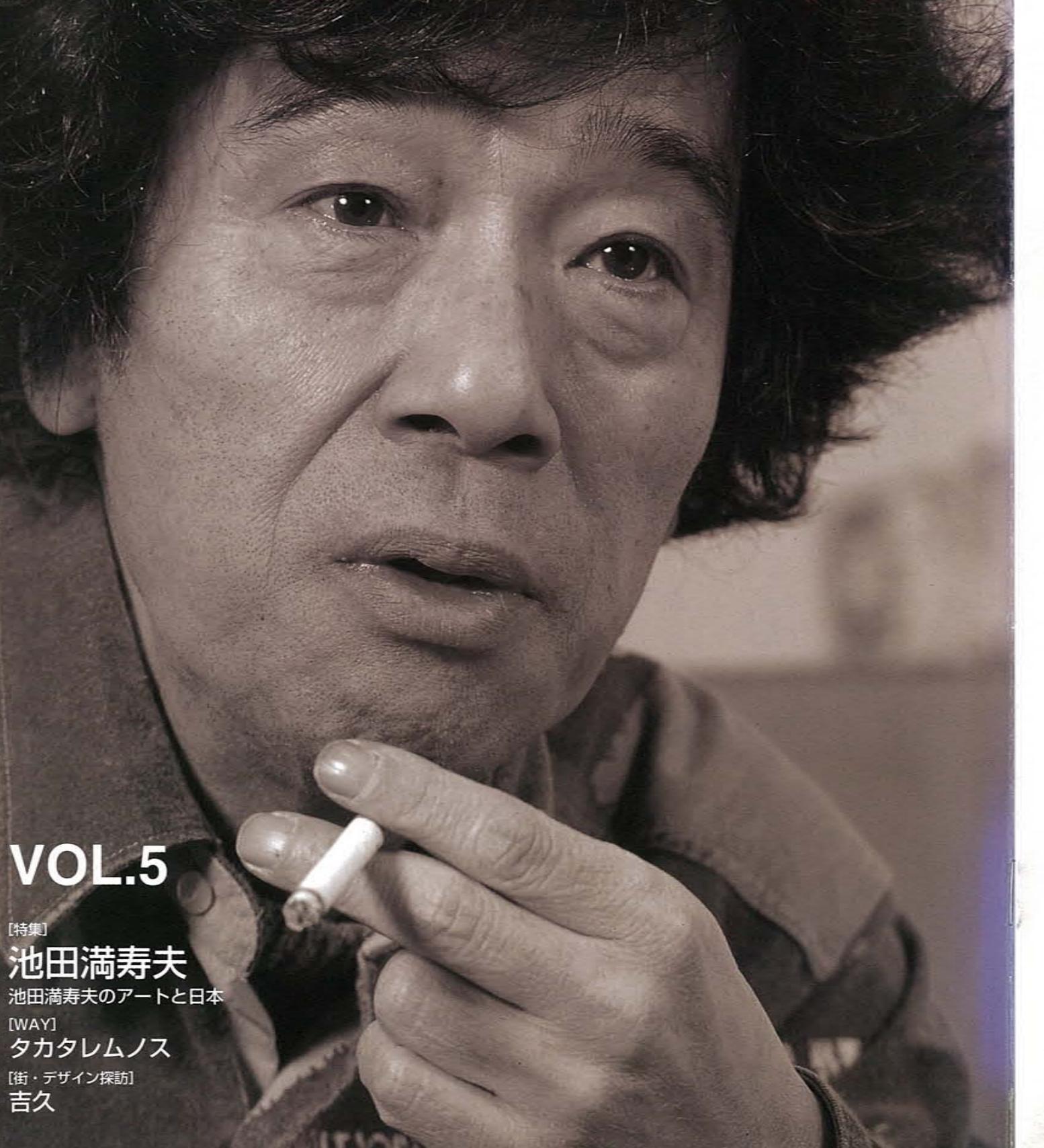


# MOVIN'



VOL.5

[特集]

**池田満寿夫**

池田満寿夫のアートと日本

[WAY]

タカタレムノス

[街・デザイン探訪]

吉久

高岡デザイン情報誌ムーヴィン

**MOVIN'**

VOL.5 (1996年3月31日発行)

## 写真提供・取材協力

池田満寿夫  
五十三郎  
イナダデザインスタジオ  
内島正雄  
加登信二  
有限会社杉本着色所  
高岡市觀光物産課  
高岡市教育委員会文化財課  
高岡市建築指導課  
高岡商工会議所  
協同組合高岡ステーションデパート  
高岡銅器団地協同組合  
株式会社タカタレムノス  
高野利江  
株式会社竹中製作所  
有限会社T&I  
伝統工芸高岡漆器協同組合  
富山インダストリアル・デザインセンター  
株式会社ニューズ・インターナショナル  
能松厚  
有限会社番町画廊  
ふる里土産研究会  
株式会社北陸銅器製作所  
三沢博昭(写真家)  
わをん本舗

(50音順)

## STAFF

Published by	高岡市中小企業課
	〒933 富山県高岡市広小路7-50
	TEL(0766)20-1285
Executive Editor	MASAYOSHI KIMURA
Art Director	HIDEAKI SOUMA
Designer	YUKIKO AZUMA
Writer	TAKAKO NISHIKAWA
Photographer	RIE MORINAGA
Printed by	MASAHIRO YOSHIZAKI
Cover Model	EIJI HONBO
	相互企画印刷㈱
	MASUO IKEDA

MOVIN'<ムーヴィン>は、MOVINGの略形で、「動く」・  
「進展する」・「感動させる」という意味を持ちます。

◆◆  
デザイン情報誌(MOVIN')は、高岡の街や人、企業そして  
行政の動きを“デザイン”というアンテナでキャッチ、  
ユニークな切り口でご紹介します。  
また、MOVIN'は高岡独自のデザインパワーを市内外に  
発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザ  
インの動き」を生み出していく情報をを目指しています。

VIEW

高岡を動かす新しい力⑤



## 池田満寿夫のアートと日本

世界的に評価の高い版画制作をはじめ、小説やエッセイ、映画、陶芸とさまざまなフィールドで精力的に創作活動をされる芸術家、池田満寿夫さん。

高岡ではブロンズ彫刻の大型モニュメントを手掛けているなど、

また、高岡都市美観賞の選考委員長をお務めいただくなど、

高岡市とは深くかかわりがあります。

今回は、創作活動をされている熱海の満陽工房を訪ね、

池田さんのアートに対する考え方や日本の伝統などについてうかがいました。

### イメージは素材に大きく影響される

——池田さんはいろんなジャンルで作品をつくっていますが、表現するときに最も大切にしていることは何ですか。

池田 絵や陶芸もそうなんだけど、最初から構図とかを決めてつくることはしません。僕の場合は、描いている内にどんどん変わっていくんです。極端に言うと風景を描いているうちに女の顔

の方は、あきらかに陶器の影響を受けているんですね。だから、今までとは違う僕だけの方法でつくれたんです。人とは違う自分だけのつくり方とか、素材に合った技法を開拓していくことが面白いんですね。版画をはじめた頃もそうでした。版画の場合、色を何十色も使おうとするときには銅版も何枚と必要です。当時は経済的にも余裕がなかったので、いかに色を組み合わせて、効率よく絵をつくり上げるかということばかり考えていました。初期の作品でルネサンス調のヴィーナスシリーズというのがあるんだけど、あれは銅版が一枚だけ。これに色をいくつも塗り分けたり、版を重ねたりして刷つたんです。この作品を発表したとき、どうやってつくったのか誰にも分からなかつたんです。



「化妆する女」(1964年) 365×345mm、ドライポイント、ルーペ、エッチング

ただ、僕は版画家なので浮世絵には非常に興味がありました。



「ナイトクラブミュージック A」(1995年) 580×465mm、リトグラフ

——伝統を拒絶してきた自分の中に日本を発見する

陶芸や鋳物は、いわば日本の伝統的な要素が強い分野ですね。どうして、このような立体作品をつくりはじめたんですか。

池田 僕の「日本とアートの関わり」っていうと、常に伝統というものを感じてきました。それで、伝統を拒絶してきた自分の中に日本を発見する



「ピカソのギター A」(1995年) 555×385mm、リトグラフ

### 同じ粘土でも 陶器とブロンズではつくり方が違う

——陶器とブロンズの原型をつくる際、素材とし

長い間、外国で仕事をしていたときも、「池田は日本人なのに、なぜヨーロッパの真似をするのか」ということを外国人から随分と言われました。つまり、日本の伝統ということを常に突き付けられるわけ。日本的なものを汲み入れないと、日本人としてのアイデンティティがないんじゃないかなと、ちょっとと考えた頃もありましたけどね。

陶器をはじめて十二年ですが、それまで「自分でつくる」ということでは、工芸にまったく関心がなかったんです。「陶器の絵付けをしてみませんか」という誘いがあった時も、興味といえば工房を見てみたいなという程度のものでした。誘われて、絵付けをしたもののが上手いかない。焼き上がりを見るとイメージは違うしかも知れませんが、とんでもない。やはり分野と分野では、絵付けには独特の技術があります。絵付けってカンバスに絵を描くのとかなり違うんです。その時、たまたまクロクロを回しているのを見て、こっちの方が面白そうだなと思つたんです。絵付けじゃなくて、「形」から入つてみると

とにしたんです。

いきなり口クロをはじめました。形をつくることに熱中して、出来上がったものを見て僕は思わず声が出るほど驚きました。その形が、まるで弥生や縄文土器のような日本古代の土器に似ていたんです。日本の伝統を拒絶していたんだけど、無意識の作品をつくり、次にリトグラフ、そしてまたエッチングに戻ると、素材の影響が表現に出てくる。つまり、素材を変える度に作風が変わってくるんですね。

初めてブロンズを手掛けたときも、彫刻のつく土偶や土器は人類が最初につくった造形です。土偶をひねって手で形をつくるという、人間の造形感覚に興味を持ちました。ただ、僕自身は陶芸家じゃないんで、最初から使える皿や茶碗などをつくらうという意識はまったくなかった。そのためどうしても作品がオブジェ的です。

池田満寿夫  
(いけだますお)  
版画家



1934年旧潟州奉天市生まれる。1960年第2回東京国際版画ビエンナーレ展にて文部大臣賞受賞。1961年パリ・ビエンナーレ展にて優秀賞受賞。1966年第33回ベネチア・ビエンナーレ展にて版画部門国際大賞受賞。1969年第8回リュブリアナ国際版画展でユゴスラビア科学芸術アカデミー賞受賞。1977年小説「エーゲ海に捧ぐ」が第77回芥川賞を受賞。1978年自作小説「エーゲ海に捧ぐ」を監督・制作。1995年第12回フジサンケイ・ビエンナーレ現代国際彫刻展(美ヶ原高原美術館)にて優秀賞受賞。その他受賞多数。

1986年ブロンズ彫刻に新境地を拓く。1989年より高岡で本格的にブロンズモニュメント彫刻の制作を始める。1992年より高岡都市美観賞選考委員長を務める。

「ピカソのギター A」(1995年) 555×385mm、リトグラフ



# 御蔵のあった町 吉久

吉久は、川に近い、海に近い。  
この地理的条件からか

江戸時代には加賀藩直営の御蔵が築かれ  
高岡界隈では一、二を競うほど

米の集散地として賑わいを見せた。  
川面に映る五棟の御蔵。

それを突っ切つて進む、いく艘もの川舟、

秋には収穫を終えた米が御蔵に運ばれ  
春にはそこから北前船に積み込まれ、

お隣の伏木港から、大阪や北海道に向けて出航する。

そんな光景が季節の風物詩として見られたのだろう。

時代は明治に移り、御蔵が廃止された後も  
米商人の町として繁栄した。

緩くカーブする街道に、整然と並ぶ吉久の町は  
江戸から明治時代にかけてつくられた。

いまは、御蔵の面影はないものの、

先人たちの仕事にかける誇りや、

建築という形を通して伺い知ることができる。

生活の美意識へのこだわりが



1. 緩くカーブした街道に沿って形成されている吉久の町並み。50余棟の伝統的な家屋は、どれも切妻造りの屋根で軒を通りに見せ、平入りの形式をとっている。  
(写真 三沢博昭)
2. 江戸時代の代表的な家構えを残す能松厚家。表側に玄関とミセ、そして、玄関の奥にはオイとイマ、ミセの奥にはブツマとザシキをそれぞれ配している。
3. 吉久御収納御蔵の跡地に建立された西照寺。入口付近に、吉久御蔵所見取絵図などを記した解説板が設置されている。
4. 秋祭りの獅子舞。かつての繁栄ぶりを想起させてくれる勇壮な舞いだ。
5. 能松厚家・ミセ。細かい出格子が採光面として機能しており、通りから室内へと柔らかな光が差し込む。
6. 江戸時代の代表的な家構えを残す加登信二家・外観。



## クロックに刻む デザインへのこだわり

— 株式会社タカタレムノス —

渋谷といえばファッショングループの発信地。この街の渋谷「Loft」といえば、それらを象徴するさまざまなモノや情報が集まるユニークなショップとして知られている。ここの一階で販売されているデザインクロックが人気を集めている。

この商品は高岡市早川に本社を構えるタカタレムノスが開発したものだ。デザインクロックの企画・製造・販売では現在、国内トップクラスの企業である。プロダクトデザインの業界では「知る人ぞ知る」といわれ、商品化を目的とする「富山プロダクトデザインコンペ1994」では課題提出企業として名乗りを上げた。「タカタレムノスならぜひトライしたい」という声も聞かれ、全国の若手デザイナーから多数の応募があった。

しかし、同社が高岡伝統産業と関わりがあることまで知る人は、地元の関係者を除くと案外少ない。

### 高岡の伝統技術と時計との出会い

高田博社長が同社を興したのは一九八四年。それまでは父親が経営する高田製作所で仏具の製造・販売に携わっていた。高田社長が入社した頃には既に仏具製造における精度の高い鋳造技術がある大手時計メーカーに注目され、時計の外装枠を製造したという実績があった。当時の特選時計（写真右下）は今も「迎賓館」に置かれている。

その後、この時計メーカーの組立工場としての道を歩むことになり、高田製作所から時計事業部門を分離・独立してタカタレムノスを設立したという経緯がある。

した販売はせず、販売先の要望に合わせて、企画、デザイン、設計図面と一緒に進めるなどトータルに関わっている。

同社が初めてデザイナーと正式契約を結んだのが八八年、その人物はプロダクトデザイナーの川崎和男氏である。「川崎さんとの仕事を、普通だと十年以上かかると思えることを二、三年で経験させてもらいました」（高田社長）といふ。川崎氏のデザインクロックは、「ガンバラ」というブランド名で、渋谷の「はじめ全国の有名デパートや専門店で扱っているので、お目にかかる人も多いはず。

同社のオリジナルクロックは、九三年から三年連続で通産省のGマークに選定されている。また、現代日本を代表するデザインやアートを紹介した「TODAYS JAPAN」（九五年にカナダで開催）にも選出された。

**形や色を考えるだけが  
デザインじゃない**

同社が重視していることの一つが、デザイナーと企業とのモノづくりのコンセンサスである。具体的なデザインの前に、まずお互いのモノに対する考え方や夢などを徹底して話し合う。「なぜ人はモノをつくるのか」というような、人とモノとの原点の話から始まり、打ち合わせを重ねながら本当にできることを見いだしていく。このことからも、デザインだけを依頼するという一方通行のモノづくりはしていない。

また当初、起用するデザイナーについてはインダストリアルにこだわっていたが、最近は分野を特に定めていない。これについて高田社長は「時計の駆動装置は既にパッケージされ、その役割も正確に時を刻むという、今

**マーケットは国境を越えて**  
入賞作品の商品化についても、入賞したデザイナーとは通常の商品開発と同様のステップで進めている。

タカタレムノスが描く次の目標は、世界中の人たちに愛されるクロックをつくることだ。「クロックは現在、アメリカやヨーロッパの一部へ輸出していますが、もつと本格的にマーケットを世界に求めたいと思っています。生産地も日本にとどまらず柔軟に考えていくたいですね。また、クリエイターがもう一つの環境の中でモノづくりができる、その評価が明確に受けられる場所が構築できれば」と語る高田社長。

モノづくりの街、高岡で生まれたデザインクロックが世界中で時を刻む日は近い。



迎賓館特選時計(1974年)

### 渋谷「Loft」発「デザインクロック

しかし、元々モノづくりが好きな高田社長である。いわゆる下請け的な工場では満足せず、いつかは自分たちのクロックをつくりたいという夢を抱いていた。いや夢というより、具体的な目標というほうが適切であろう。というのも、組立工場として完成品をつくれるという技術に加え、幅広い時計の組み立てにタッチしていたことから、クロックの市場がよく見えるポジションにいたわけである。これを武器にデザインの力をプラスすれば、注目されるオリジナルクロックがつくれるはずだと確信したという。資金面やデザイン体制などの整備もあり、実現するまでほぼ五年の歳月を要した。

**プロダクトデザイナー川崎和男氏  
との出会い**

タカタレムノスの業務は大きく三つに分類できる。まず、時計のムーブメントの部品販売の売上が約四割を占め、特注・OEMなどの製造・販売が約三割、そしてオリジナルクロックの製造・販売が約三割。

特筆すべきことは、いずれの場合でもデザインと企画を重視していることだ。部品販売でも決して低価格のみをセールスポイントに





## Manyo Goods

&lt;万葉グッズ&gt;

高岡は奈良、飛鳥と並ぶ万葉の故地として知られた土地である。かつて越中国守として赴任した大伴家持が、多くの歌に詠んだ美しい自然が現在も残る。いま高岡では「万葉のふるさと」として高岡市万葉歴史館などの施設や万葉をテーマに、様々なイベントが実施されている。ここに紹介するグッズは、そんな万葉にちなんだユニークなお土産。高岡でしか手に入らない万葉グッズは、全国の万葉ファンや観光客から人気を集めている。

ホロ酔い気分で  
万葉たより

一献すれば万葉ムードに  
漫れそう。若い女性にも  
人気のカップ酒。  
1本/250円



懐かしの金太郎あめ  
家持どの  
コミカルな家持の顔やカタゴの花などが出てくる万葉版の金太郎あめ。  
毎年8月に高岡古城公園で開催されている越中万葉夢幻謡でも人気。  
1袋/300円

時を超えた香り  
とき  
時刻めき

「万葉時代をイメージさせる色と香り」というテーマでつくられた万葉ロマン漂々香水。時間の経過とともに香りが変わるものも楽しめ。  
1本/3,000円



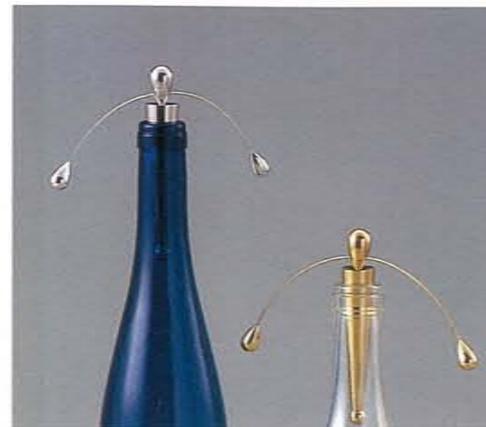
いつまでも美しく咲く  
カタカゴの  
アメリカンフラワー  
家持に詠まれた高岡市の花・カタカゴ(カタクリ)。この花をモチーフに手作りで飾ったデザインフラワー。  
1鉢/3,500円

高岡のキャラクターグッズ  
キーホルダー

家持や高岡大仏がデザインされたブロンズ製キーホルダー。銅器の街・高岡でつくられた。  
1個/500円

オタヤ通りにOPEN  
みちしるべ

「高岡が見える店」をキャッチフレーズに、高岡市の若手経営者グループが中心となって平成7年オープン。土産品の販売をはじめ観光案内、ミニイベントの開催などユニークな活動を展開している。



「のんべえ」 高野利江



「珠型 香炉」 杉本着色所



「ホームパーティーセット」 内島正雄

クラフトマンたちの  
熱き夢をのせて

工芸都市高岡クラフトコンペティション  
10年の軌跡

GUIDE  
ガイド

## コンペで変わる、コンペが変えた

「工芸都市高岡クラフトコンペティション」は、平成七年の秋で記念すべき第十回を迎えた。初回応募総数一、一六二点で始まったこのコンペも、第十二回は一、三三七点。回を重ねることに規模、内容ともに充実し、名実ともに全国規模のコンペとして定着した。地方都市である高岡で創設されたコンペがこれほどまでに成長を遂げた背景には、地元の人々の献身的な情熱があったからに他ならない。

なかでも漆器・銅器業界の青年で組織する高岡伝統産業青年会を中心とした協力スタッフは、地道な作業を率先して引き受けた。彼らは「苦労も多いが、来場者や著名デザイナーと交流を深めることで商品開発のきっかけもつかめるし、全国から集まつた作品を見るだけでも良い勉強になる」と、十年間の活動を振り返る。クラフトコンペがなかつたら、こんなチャンスは恐らくなかつただろう。

## グループ企業の誕生

このように、クラフトコンペは若手を中心にして地元高岡のモノづくりに対する意識に大きな影響を与えていた。グループ企業によるモノづくりの活性化もその一つ。銅器などの若手経営者六人で設立したニユーズ・インター・ナショナルは格好の例。平成七年十一月には東京六本木のアクシスビル内にショールームを兼ねた営業所を開設し、新商品開発や販路の開拓に努めている。第九回に出品した「トーミヨー(灯明)」は銀賞を受賞。第十二回には、同コンペが主催する商品開発補助事業

に参加し、第一線で活躍するデザイナーとともに開発した「灰皿シリーズ」を出品。現在、商品化に向けて最終調整が進められている。企業やデザイナーとのネットワークづくり

杉本着色所は、マルモプラスを施した「珠型 香炉」を出品し、見事入選を果たした。マルモプラスは、杉本着色所と銅器メーカーの共同開発したもので、銅合金の結晶粒を表面に浮き出させる表面処理だ。業界では古くから茶真鎧の名で知られていたマルモプラスは、化学的処理によって均一な結晶粒を量産できる。

杉本文吉技術開発部長は「クラフトコンペでは商品開発のきっかけをつかみたかった。東京展では中央のデザイナーから商品化への誘いもあり、手こたえは十分」と語る。クラフトコンペは、さまざまな業界の企業やデザイナーと出会いう貴重なチャンスなのだ。同社

に取り組んでいる。高野さんは「高校生の頃からクラフト展でお気に入りの作品を購入しては楽しんできたが、短大で勉強するうちに、いつかは自分も出品したいと思うようになつた。今回が十周年と知り、ぜひ憧れのクラフトコンペに入選したかった」と出品へのきっかけを語る。

入選作品「のんべえ」の制作にあたっては、デザイン、原型、仕上げ、色付けを高野さん自身の手で行い、設備と熟練の技術を要する鋳造、マッキの工程は地元高岡の職人に依頼している。同作品は来場者の人気を集め、東京展と併せて四〇点もの注文があつた。高野さんは、この好調な売れ行きに「クラフト展の終了と同時に、この作品が消えてしまうのは寂しい。企業が作品を買い取ってしまうのは寂しい。企業が作品を買取って商品化したり、クラフト展の専門店を設けて入選作品を販売すれば、新しい動きにつながるのではないか」とクラフトコンペの新たな発展に期待している。

毎年二、〇〇〇点以上も作品が寄せられるクラフトコンペ。その難題に大きな夢を抱いて挑むクラフトマンたちの情熱も、クラフトコンペを成長させていく一つの力であることは間違いない。

今回「ホームパーティーセット」で奨励賞を受賞した内島正雄さんは、高岡漆器の伝統的な技法を基盤に、クラフト的な要素を新たに取り入れ、第五回から出品を続ける漆職人だ。伝統工芸やクラフトといった分野を問わず、「時代に合ったモノづくり」をテーマに、現代の暮らしに何が必要かを考え、常にライ



「工芸都市高岡クラフトコンペ」は、高岡市が全国に向けた工芸・デザイン情報の発信基地となることを目指し、産業界、商工会議所、行政が一体となって昭和61年より毎年開催している。当初から応募要項には「適正な価格で販売可能なもの」「美術工芸品を除く」という条件を明記し、現代の暮らしに密着したコンペであることを主張してきた。審査員は、既成の美術工芸品の在り方にとらわれない建築家、グラフィックデザイナー、工業デザイナー、美術評論家など、さまざまな分野の専門家で構成されている。

海外のクラフト作品展  
家具、ガラス、陶磁器、木工、金属、テキスタイルなど、海外のクラフト約300点を展示・紹介。10年の歩み展  
過去10年間のグランプリ作品やポスターなどを展示。

※富山県高岡文化ホールにて「工芸都市高岡」95クラフト展と同時開催。(平成7年11月1日~6日)